



TITLE:

<論文>日本近代におけるミッション・スクールの階層イメージ:明治期同志社を例に、族籍に着目して

AUTHOR(S):

佐藤, 八寿子

CITATION:

佐藤, 八寿子. <論文>日本近代におけるミッション・スクールの階層イメージ: 明治期同志社を例に、族籍に着目して. 教育・社会・文化: 研究紀要 2002, 8: 13-24

ISSUE DATE:

2002-07-30

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/187231>

RIGHT:

日本近代における ミッション・スクールの階層イメージ

——明治期同志社を例に、族籍に着目して——

佐 藤 八 寿 子

Hierarchical Image of Mission School in Modern Japan :
The Case of the Family Register of the Students of
Doshisha During the Meiji Era

Yasuko SATO

1. 階層イメージの根拠

1-1. 意義と目的

日本のミッション・スクールには「お坊ちゃん・お嬢さん学校」イメージがある。それはなぜか。

このような「ミッション・スクール＝上流」というイメージは、例えば欧米のミッション・スクールには見られない、日本に独特のものである。日本のミッション・スクールは、「西洋近代」の表層イメージを担いつつ、近代ナショナリズムとの激しい対立を経験したもの⁽¹⁾、たとえば中国におけるように、近代化の進展する過程で国内から一掃排除されることはなかった。一方、宗教としてのキリスト教について見れば、隣国の韓国と比較するとき、日本のキリスト教信者の数は圧倒的少数に留まる。

明らかに日本のキリスト教は「教育」において際だった機能を果たしていると言えよう。上流イメージそのものは、あくまでもイメージにすぎない。しかしそうしたイメージが、進学、就職、結婚などの現実において、例えば偏差値といったようなメリトクラティックな尺度同様に、否むしろ、より頻繁に参照活用されていることを、われわれは経験的に知っている。その意味で、イメージはメリトクラティックな尺度に勝るとも劣らぬ効力を発揮しうる。

にもかかわらず、教育社会学の領域では、従来イメージ研究はやや等閑にふされてきたきらいがあると言わざるを得ない。

例えば、明治期の学生文化については、すでに高橋1992、竹内1997、Notter2000などの研究蓄積があるが、これらの主対象は官立学校であり、ミッション・スクール等の私学につ

いてはあまり検討されてこなかった。さらに、社会イメージは、学生文化、校風とも厳密には異なるものであり、在籍者、卒業者の母校イメージと、学外者一般が同校に対して抱く社会的なイメージが全く異なる場合も少なくない。このような在籍者の経験、実態と、社会的イメージの「ずれ」の問題をとりあつかった研究は、管見では未だ蓄積はないものと考えられる。

本稿は、僅かながらこの空白を埋めることを意図する議論の前段階となる作業の報告ノートである。すなわち、日本におけるミッション・スクールのイメージが、如何に形成、再生産され、定着したか、また社会的に如何なる機能を果たしているかという問題意識に基づくマクロな研究の一部をなすものでもある。

1-2. 問題設定

「ミッション・スクール＝上流イメージ」の形成には、いくつかの要因が考えられる。

- | | |
|---|--------|
| (1) 学校のエ育内容（教育方針、カリキュラム等）の特質、学費 | 内的要因 |
| (2) 在籍者の傾向 | インプット |
| ①族籍 ②経済 ③職業 ④出身地域等 | |
| (3) 卒業生の進路 | アウトプット |
| ①職種 ②収入等 | |
| (4) 外的構築 | 外的要因 |
| 上記(1)～(3)の特質がない／乏しいにもかかわらず、社会的環境によってイメージが形成された。 | |

現実には(1)～(4)の複合作用、相乗的效果によってイメージが形成されてきたものと推測されるが、その過程と動的状況をより具体的に解明することが最終的な目標となる。

本稿では、2-1. において、上の(2)①在籍者の族籍に着目したケース・スタディ(同志社)を報告し⁽²⁾、さらに2-2. で華族の学歴の特徴を概観し、ミッション・スクールとの関連を考察しつつ、仮説を提出することとする。

2. 調 査

2-1. ミッション・スクール在籍者における族籍分布——同志社を例に

2-1-1. 典拠資料の概要

ここでは、明治三十三年調『同志社各学校生徒原籍簿』により、その族籍分布をみることにした⁽³⁾。

『三十三年調 同志社各学校生徒原籍簿』<図1>は同志社社史資料編纂室所蔵で、同室のご厚意により閲覧撮影を許された。特に記して感謝したい。



図1 『明治三十三年調 同志社
各学校 生徒原籍簿』
(左：表紙、下：概要)

氏名	生年	生月	生日	生所	入塾年	入塾月	入塾日	入塾所	備考
山田 太郎	明治	三	一	東京	明治	三	一	同志社	
山田 次郎	明治	三	二	東京	明治	三	二	同志社	
山田 三郎	明治	三	三	東京	明治	三	三	同志社	
山田 四郎	明治	三	四	東京	明治	三	四	同志社	
山田 五郎	明治	三	五	東京	明治	三	五	同志社	
山田 六郎	明治	三	六	東京	明治	三	六	同志社	
山田 七郎	明治	三	七	東京	明治	三	七	同志社	
山田 八郎	明治	三	八	東京	明治	三	八	同志社	
山田 九郎	明治	三	九	東京	明治	三	九	同志社	
山田 十郎	明治	三	一〇	東京	明治	三	一〇	同志社	
山田 十一郎	明治	三	一一	東京	明治	三	一一	同志社	
山田 十二郎	明治	三	一二	東京	明治	三	一二	同志社	
山田 十三郎	明治	三	一	東京	明治	三	一	同志社	
山田 十四郎	明治	三	二	東京	明治	三	二	同志社	
山田 十五郎	明治	三	三	東京	明治	三	三	同志社	
山田 十六郎	明治	三	四	東京	明治	三	四	同志社	
山田 十七郎	明治	三	五	東京	明治	三	五	同志社	
山田 十八郎	明治	三	六	東京	明治	三	六	同志社	
山田 十九郎	明治	三	七	東京	明治	三	七	同志社	
山田 二十郎	明治	三	八	東京	明治	三	八	同志社	
山田 二十一郎	明治	三	九	東京	明治	三	九	同志社	
山田 二十二郎	明治	三	一〇	東京	明治	三	一〇	同志社	
山田 二十三郎	明治	三	一一	東京	明治	三	一一	同志社	
山田 二十四郎	明治	三	一二	東京	明治	三	一二	同志社	
山田 二十五郎	明治	三	一	東京	明治	三	一	同志社	
山田 二十六郎	明治	三	二	東京	明治	三	二	同志社	
山田 二十七郎	明治	三	三	東京	明治	三	三	同志社	
山田 二十八郎	明治	三	四	東京	明治	三	四	同志社	
山田 二十九郎	明治	三	五	東京	明治	三	五	同志社	
山田 三十郎	明治	三	六	東京	明治	三	六	同志社	
山田 三十一郎	明治	三	七	東京	明治	三	七	同志社	
山田 三十二郎	明治	三	八	東京	明治	三	八	同志社	
山田 三十三郎	明治	三	九	東京	明治	三	九	同志社	
山田 三十四郎	明治	三	一〇	東京	明治	三	一〇	同志社	
山田 三十五郎	明治	三	一一	東京	明治	三	一一	同志社	
山田 三十六郎	明治	三	一二	東京	明治	三	一二	同志社	
山田 三十七郎	明治	三	一	東京	明治	三	一	同志社	
山田 三十八郎	明治	三	二	東京	明治	三	二	同志社	
山田 三十九郎	明治	三	三	東京	明治	三	三	同志社	
山田 四十郎	明治	三	四	東京	明治	三	四	同志社	
山田 四十一郎	明治	三	五	東京	明治	三	五	同志社	
山田 四十二郎	明治	三	六	東京	明治	三	六	同志社	
山田 四十三郎	明治	三	七	東京	明治	三	七	同志社	
山田 四十四郎	明治	三	八	東京	明治	三	八	同志社	
山田 四十五郎	明治	三	九	東京	明治	三	九	同志社	
山田 四十六郎	明治	三	一〇	東京	明治	三	一〇	同志社	
山田 四十七郎	明治	三	一一	東京	明治	三	一一	同志社	
山田 四十八郎	明治	三	一二	東京	明治	三	一二	同志社	
山田 四十九郎	明治	三	一	東京	明治	三	一	同志社	
山田 五十郎	明治	三	二	東京	明治	三	二	同志社	
山田 五十一郎	明治	三	三	東京	明治	三	三	同志社	
山田 五十二郎	明治	三	四	東京	明治	三	四	同志社	
山田 五十三郎	明治	三	五	東京	明治	三	五	同志社	
山田 五十四郎	明治	三	六	東京	明治	三	六	同志社	
山田 五十五郎	明治	三	七	東京	明治	三	七	同志社	
山田 五十六郎	明治	三	八	東京	明治	三	八	同志社	
山田 五十七郎	明治	三	九	東京	明治	三	九	同志社	
山田 五十八郎	明治	三	一〇	東京	明治	三	一〇	同志社	
山田 五十九郎	明治	三	一一	東京	明治	三	一一	同志社	
山田 六十郎	明治	三	一二	東京	明治	三	一二	同志社	
山田 六十一郎	明治	三	一	東京	明治	三	一	同志社	
山田 六十二郎	明治	三	二	東京	明治	三	二	同志社	
山田 六十三郎	明治	三	三	東京	明治	三	三	同志社	
山田 六十四郎	明治	三	四	東京	明治	三	四	同志社	
山田 六十五郎	明治	三	五	東京	明治	三	五	同志社	
山田 六十六郎	明治	三	六	東京	明治	三	六	同志社	
山田 六十七郎	明治	三	七	東京	明治	三	七	同志社	
山田 六十八郎	明治	三	八	東京	明治	三	八	同志社	
山田 六十九郎	明治	三	九	東京	明治	三	九	同志社	
山田 七十郎	明治	三	一〇	東京	明治	三	一〇	同志社	
山田 七十一郎	明治	三	一一	東京	明治	三	一一	同志社	
山田 七十二郎	明治	三	一二	東京	明治	三	一二	同志社	
山田 七十三郎	明治	三	一	東京	明治	三	一	同志社	
山田 七十四郎	明治	三	二	東京	明治	三	二	同志社	
山田 七十五郎	明治	三	三	東京	明治	三	三	同志社	
山田 七十六郎	明治	三	四	東京	明治	三	四	同志社	
山田 七十七郎	明治	三	五	東京	明治	三	五	同志社	
山田 七十八郎	明治	三	六	東京	明治	三	六	同志社	
山田 七十九郎	明治	三	七	東京	明治	三	七	同志社	
山田 八十郎	明治	三	八	東京	明治	三	八	同志社	
山田 八十一郎	明治	三	九	東京	明治	三	九	同志社	
山田 八十二郎	明治	三	一〇	東京	明治	三	一〇	同志社	
山田 八十三郎	明治	三	一一	東京	明治	三	一一	同志社	
山田 八十四郎	明治	三	一二	東京	明治	三	一二	同志社	
山田 八十五郎	明治	三	一	東京	明治	三	一	同志社	
山田 八十六郎	明治	三	二	東京	明治	三	二	同志社	
山田 八十七郎	明治	三	三	東京	明治	三	三	同志社	
山田 八十八郎	明治	三	四	東京	明治	三	四	同志社	
山田 八十九郎	明治	三	五	東京	明治	三	五	同志社	
山田 九十郎	明治	三	六	東京	明治	三	六	同志社	
山田 九十一郎	明治	三	七	東京	明治	三	七	同志社	
山田 九十二郎	明治	三	八	東京	明治	三	八	同志社	
山田 九十三郎	明治	三	九	東京	明治	三	九	同志社	
山田 九十四郎	明治	三	一〇	東京	明治	三	一〇	同志社	
山田 九十五郎	明治	三	一一	東京	明治	三	一一	同志社	
山田 九十六郎	明治	三	一二	東京	明治	三	一二	同志社	
山田 九十七郎	明治	三	一	東京	明治	三	一	同志社	
山田 九十八郎	明治	三	二	東京	明治	三	二	同志社	
山田 九十九郎	明治	三	三	東京	明治	三	三	同志社	
山田 一百郎	明治	三	四	東京	明治	三	四	同志社	

『同志社各学校生徒原籍簿』の各学校とは、以下の各校をさす。同志社英学校（明治8年創立）、同志社予備学校（明治20年設置）、同志社普通学校、同志社神学校（明治22年改称）、同志社政法学校（明治24年開校）、同志社高等学部政法学校（明治30年改制、明治37年廃校）、同志社尋常中学校（明治29年創立、明治32同志社中学校と改称）、同志社普通学校（明治33創立、中学校廃止）。今日、この『原籍簿』と「卒業生名簿」以外、同時期の同志社在籍者の詳細な一覧の一次資料は発見されていない。卒業生名簿では氏名および人数等は確認できるものの、族籍、原籍、出身地等の詳細な記載があるのは当資料のみである。（ちなみに、「医師」「農業」などといった親職の記載のある部分もあるが、少数である。）また『原籍簿』によれば中途退学・退校者も少なからず存在しているが、その実態も卒業生名簿から知ることは出来ない。そこで本稿では、同志社に関して現時点でおそらく最も詳細に当時の在籍者の族籍分布を知ることのできる本資料を活用することとした。

記載されている生徒数は、明治25年から36年までの入学者におよぶ637人。いろは順に、各在籍者の姓名・誕生年月日、保証人名のほか、原籍（実家住所と保護者族籍、および保護者との続き柄が記入されている）・摘要欄には入・進学年と学校名が記載されている。退学・除籍などの中退者および卒業者についても、朱筆で×が記されているが、本稿ではなるべく多くのデータを得る目的から朱筆の加えられた者も含むこととした。短期であっても一度在籍した記録のある者については、すべて考慮に入れたことになる。

このデータとの比較のため、明治三十三年調『第三高等学校一覧』によって〈表2〉を示した。但し、同志社の『原籍簿』に記載されているのは、上記のとおり十年近くに及ぶ在籍者すべてであり、第三高等学校のデータは、明治三十三年九月現在の在籍者である。本来、比較するためには、第三高等学校についても同じ時期区分を対象とするか、あるいは同志社在籍者を三高と同じ条件の在籍者に限定するか、何れかの方法を取り厳密を期すべきところであるが、前者ではあまりに三高在籍者数が多すぎ、また、後者の方法では同志社在籍者数が少なすぎ、官立・第三高等学校に対するキリスト教主義学校・同志社の特徴を探るという当初の目的を達し得ない。そこでとりあえず今回はあくまで便宜的ではあるが、明治三十三年の三高資料を、あくまでも参考までに提示するという方法をとることとする。また、三高の数字は、医学校をのぞく本校のみで全校のものではない。1887年、同志社病院ならびに看病婦学校が開業しており、同志社医学校の名簿はないことから、医学関係者の数字は除外した。

同じく、参考として、『文部省年報』および各学校一覧をもとに集計されたデータ（竹内1997）から抜粋作成した〈表3〉を示す。

<表1>同志社生徒族籍別構成（人[%]）

平 民	4 5 6 [7 2]
士 族	1 5 4 [2 4]
華 族	5 [1]
不 明	2 2 [3]
計	6 3 7 [1 0 0]

明治33年調『同志社各学校生徒原籍簿』により作成

<表2>第三高等学校生徒族籍別構成（人[%]）

	本校	医学部	計
平 民	3 2 3 [6 4]	3 5 8 [7 5]	6 8 1 [7 0]
士 族	1 8 2 [3 6]	1 1 7 [2 5]	2 9 9 [3 0]
華 族	1 [0]	0 [0]	1 [0]
計	5 0 6 [1 0 0]	4 7 5 [1 0 0]	9 8 1 [1 0 0]

明治33年調『第三高等学校一覧』第三高等学校生徒階級人員一覧表より抜粋作成

<表3> 旧制高等中学校生徒族籍別構成（人[%]）

	明治19年 一高	明治20年 三高	明治23年 全高中	明治25年 全高中
平 民	4 6 2 [3 9]	1 9 9 [6 2]	1 9 2 6 [4 8]	2 1 4 2 [4 8]
士 族	7 2 4 [6 1]	1 1 9 [3 7]	2 0 4 9 [5 2]	2 2 9 3 [5 2]
華 族	2 [0]	1 [0]	7 [0]	8 [0]
計	8 6 9 [1 0 0]	3 1 9 [1 0 0]	3 9 8 2 [1 0 0]	4 4 4 3 [1 0 0]

竹内洋『立身出世主義』1997 p.83表4-2より抜粋作成。%は小数点以下四捨五入

2-1-2. 同志社在籍者の族籍別構成の特徴

『第三高等学校一覧』による同年九月当時の同校在籍者の族籍と比較すると、第三高等学校在籍者に占める士族率30%に対し、同志社は24%で6%下まわる。華族については、第三高等学校の981人中の1人に対し、同志社は637人中5人を数える（<表1>及び<表2>を参照）。

竹内1997によれば、明治二十五年の高等中学校全体における士族率は約52%だが、京都の第三高等中学校については、他よりも士族率が低い（平民率が高い）ことが特徴として報告されている<表3>。同志社の士族率はその三高の士族率を下まわる。

華族に関しては、同志社1%に対し、全高等中学校において明治二十三年の在籍者の占有

率は0.2%、二十四年0.1%、二十五年0.2%と、いずれも1%を超えない。後に見るように、これは学習院の存在によるところが大きいのと考えられるが、旧制高校の華族率の低さは、英国のパブリックスクールの、イートン校などの名門校において、貴族師弟の占める割合が高かったことと大きく異なる点であると竹内1997は指摘している。この資料を見るかぎり、同志社は土族率においては、他の旧制高校より低い傾向にある第三高等学校よりもなお一層低く、華族については若干ながら多いということが認められる。しかし、華族の在籍に関しては、数そのものがわずか数人単位と非常に少ないことから、この例をもって占有率の高低を判断するのはいささか困難である。そこで次に、視角を変え、華族の側から進学先、出身校を見たとき、ミッション・スクールがどのような位置にあったかを考察することとする。

2-2. 華族大鑑にみる学歴分布

2-2-1. 典拠資料の概要

華族の学歴の特徴を知るため、1939（昭和14）年10月刊行『華族大鑑』（華族大鑑刊行会／日本図書センター、1990）の第一編「公爵」、第二編「侯爵」、第三編「伯爵」から学歴一覧を作成した。

<表4>

公爵家	259
侯爵家	391
伯爵家	208
計	858

<表5>

男性	389
女性	469
計	858

<表6>

学歴記載あり	351
学歴等不明	507
計	858

<表7>学歴判明者の出生年

出生年	
1850年以前	2
1851～1860年	1
1861～1870年	8
1871～1880年	25
1881～1890年	40
1891～1900年	64
1901～1910年	101
1911～1920年	85
1921～1930年	21
1931年以降	3
不明	1
計	351

この資料には、華族の家歴、当主の閥歴、現況、家族状態、親族関係等について、各家ごとの詳細な記載がある。学歴が明記されていた者は、1847（弘化4）年から1939（昭和14）

年現在まで、三世代以上にわたる時期の出生者、351名だった。刊行時点に故人となっている場合、当然記載はない。上で、明治25年～36年の間に同志社に在籍した華族5人が、こちらのデータ上に現われないのは、昭和14年現在すでに死亡しているか、あるいは、同志社在籍後に別の学校・大学に進学し、学歴として後者のみ記載したことが考えられる。

351人の有学歴者の学歴内容を、分類、まとめたのが、以下の一覧表・グラフである。

<表8>『華族大鑑』（公爵・侯爵・伯爵）にみる華族の学歴一覧 (人)

学習院		19
女子学習院	華族女学院出身	15
	学習院女学部	23
	女子学習院	118
留学・外遊	暁星中学、英国留学	☆ 1
	英国留学	15
	その他欧州留学	5
	その他留学	6
	米国留学	4
軍関係	海軍兵学校、海軍大学校、海軍水雷学校	5
	陸軍士官学校	4
	陸軍	2
	軍人、軍籍	4
官立（男）	大阪外語出身	1
	鹿児島県立商業学校出身	1
	九州帝国大学在学、従五位	1
	京都絵画専門学校出身	1
	京都帝国大学出身	3
	京都帝国大学（法）	7
	京都帝国大学（理）	1
	高等農林学校出身	1
	水産講習所出身	1
	東京都工業大学在学	1
	東京高師附属中学在学	1
	東京帝国大学（文）	9
	東京帝国大学（法）	7
	東京帝国大学（医）	1

	東京帝国大学出身	3
	東京帝国大学（農）	2
	東京帝国大学（理）	2
	東北帝国大学	2
	東京農業大学	4
官立（女）	お茶の水高女	4
	鎌倉高女出身	1
	京都高女出身	1
	京都府立第一高女出身	2
	京都府立第二高等女学校出身	1
	静岡高女出身	1
	東京女高師附属高女出身	1
	鹿児島県立第一高女出身	1
私立（男）	慶應義塾	8
	國學院大學出身	3
	成城学園高校在学中	1
	中央大学出身	2
	東京専門学校邦語法律科卒	1
	同志社大学出身	☆ 1
	日本大学出身	1
	法政大学出身	2
	立教大学	☆ 1
	立命館大学	1
	早稲田大学	2
私立（女）	聖心女子学院出身	☆ 5
	雙葉高女	☆ 3
	佛英和高女出身	☆ 1
	白百合高女	☆ 1
	精華女学校出身	1
	成蹊高女研究科出身	1
	香蘭女学校出身	☆ 1
	跡見女学校出身	2
	金欄会高女出身	1

その他	医学士	1
	経済学士	8
	工学士	1
	工学博士	1
	農学士	2
	文学士	7
	法学士	7
	理学士	2
合計		351

☆ は、ミッションスクール。男2人、女11人、計13人 [全有学歴者の3.7%]

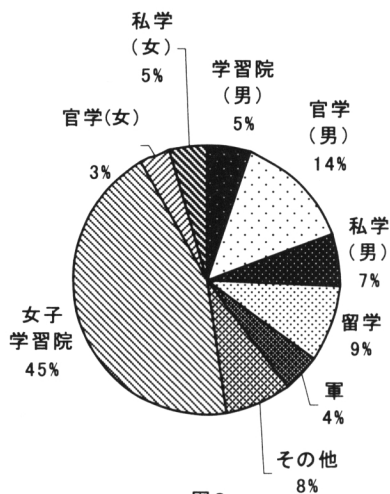


図2

<表9>

ミッションスクール	11
非ミッション私学	5
官立	12
女子学習院	156

分類においては、例えば「中等教育、高等教育機関を経たのち、兵学校に入り、さらに留学する」等の履歴が多重するケースでは、①留学経験 ②軍関連進路 ③最終学歴 の順に優先して分類した。したがって、学習院入学者は圧倒的多数であるが、その後他の学校・大学に進学した場合、後者の学校・大学のグループに分類してある。また、官学、私学出身如何にかかわらず、外遊経験者はすべて、留学グループに分類した。特に出身校名が明記され

ず、学士、博士などと記載された分についてはとりあえず「その他」項目にまとめた。軍人、軍籍は学歴ではないが、軍関連学校在籍者、卒業者とともに「軍関係」としてカウントした。「皇室の藩屏」として政治と軍事の実権を執るべく、明治天皇より華族の青年は陸海軍々人になるべしとされたが、そのノブレスオブリージュが実質のともなわないものであったことは浅見1999らによって指摘されている。

2-2-2. 華族とミッション・スクール

結論から言って、「華族にはミッション・スクール在籍／出身者が多い」ことをひとつの作業仮説として出発したわけだが、予測に反し、そうした傾向および特徴を見い出だすことはできなかった。華族の出身校は、まず学習院（女子学習院および前身の華族女学校を含む）が圧倒的に多く、ついで官学、その他の私学と続き、ミッション・スクールの出身者はあくまで低い数字に留まった。『華族大鑑』の記載は主として最終学歴のみの場合が多く、初等、中等教育、および予備学校の段階でミッション・スクールを経て官学等の高等教育機関に進んだ可能性はある。しかしそれにしても、学習院の圧倒的数値には及ぶべくもない。

ただし、女子についてみると、ミッション・スクールは非ミッション私学の倍となっている。

また、女子ならではのミッション・スクール関連のエピソードとしては、たとえば、華族女学校の教育を不満として娘を聖心女学院に転校させた蜂須賀侯爵家のケースがある⁽⁴⁾。あくまでもレアケースながら、転校先が官立女学校ではなく聖心女学院だった点、留意したい。

いずれにせよ、ここで見るかぎり、この時代までの華族とミッション・スクールの関係は、数値化できるほど濃厚なものとは言えなかった。とすると、たとえば今日一般に抱かれる「皇室とミッション」といったようなイメージは、より新しい、すなわち「戦後的」現象であるということも今後検討すべき課題としてあげねばなるまい。

3. 小結論、仮説、および今後の展望

以上、今回の扱った資料からは、

- ① 明治期同志社在籍者のうち士族率は官立校を下まわる。
- ② 明治期同志社在籍者のうち華族率についても特に顕著な特徴が認められない。
- ③ 華族のうちでミッション・スクールへ行った者は特別多数ではない。

という3点を確認するに留まった。

同志社についてのこの特徴が、仮に他のミッション・スクールにも共通にみられるとするならば、「ミッション＝上流」というイメージは、少なくとも在籍者の族籍にはよらない、ということになる。

ではイメージは何時、何によって構成されたものなのか。上記のイメージ形成要因の、他の可能性についても詳細に検討していく必要がある。たとえば、教育方針、カリキュラムにおける特質は当然不可欠の検討対象である。「ミッション＝西洋」という印象は根強く、今

日もなおミッション・スクールは外国語（欧米近代語）が強いとされている。しかし実際には、官立高等学校の学生文化もまた外国語教育を基礎とする欧米的教養に支えられていたことはすでに指摘されており（竹内1997等）、その「欧化」の内容と実態については詳細な比較検討の必要がある。

また今回は、明治期同志社を取り上げたこと、また華族として公爵・侯爵・伯爵を取り上げたことにおいて、きわめて限定的調査に終わった。華族と一口に言っても、公家・大名・勲功の各華族では文化が大きく異なっており⁶⁾、当然学業へのインセンティブにも大きなばらつきがあるはずである。今後の分析においてはその対象領域、量、質ともに展開する必要があるだろう。

一方、上のことと同時に、今回明らかになったこととしては、華族有学歴者における女子の多さがあげられる。そのうちミッション・スクールが占める割合はわずか6%にとどまったものの、質的問題については検討の余地がある。そもそも日本におけるミッション・スクール・イメージそのものにはジェンダーの要素が深くかかわっており、今後は対象を女子教育に限定したほうが有効であると考えられる。

以上を今後の課題として、多角的検討を継続することとする。

<注>

- (1) 例えば、明治2、30年代には、ミッション・スクールをめぐる不敬事件が多数発生した（小股1994、95、98）。特にミッション・スクールの不敬事件に限定した社会学的分析研究については、佐藤1999。
- (2) 一口にミッション・スクールと言ってもその校風は実に多彩であって、各学校、大学に個々独自の特色は当然存在する。地方色また時代的变化もまた多様に違いない。ここでとりあげる断片的な例をもって全体の傾向を語ることはもちろんできない。しかし、まさにそうした事情故に、従来のミッション・スクール研究が各校史、個人史、思想史、各宗派研究等に限定されてきた現状をみれば、あえて包括的な側面から社会学的アプローチをとることの意義は少なくないと思われる。大まかなイメージとして「ミッション・スクール＝ハイカラ、旧制高校＝パンカラ」といった通念が存在するのは事実であり、本稿はその社会イメージに対し、具体的資料によってわずかながらも切り込むことを目的とするものであり、限定的な事例をもって総体を断ずるものではない。
- (3) ミッション・スクールの事例として同志社をとりあげる妥当性については、いくつかの問題も存在する。第一に、東京ではなく京都という点である。明治天皇が華族の東京在住を命じた背景からも、東京のミッション・スクールのほうが、華族との相関は期待できる。今回は資料的制約から同志社をとりあげたが、今後別の学校についても調査を進めたい。第二に、同志社は「外国ミッションが経営するミッション・スクールでなく、日本人が経営するキリスト教主義学校」（学校法人同志社1979, p. 433）として自ら「ミッション・スクール」とは称さない。ミッションとは狭義には外国宣教師団を指し、広義には伝道・布教・使命など、教育・医療・啓蒙活動を包括する活動全般を意味する。したがってミッション・スクールとは、狭義には、特定のキリスト教外国教会の未開拓伝道事業の一環として設立・運営される学校を意味するが、しばしば広義にはキリスト教的使命を帯びた学校全般を指す。ミッション＝外国宣教師団というイメージを嫌い、ナショナリズムの強まった昭和初期にはクリスチャン・スクールという呼称も登場した。1951年、基督教学校教育同盟理事会は「キリスト教主義学校」と呼称する申し合わせを行い、今日プロテスタント系では「キリスト教（主義）学校」という用語が一般的になっている（キリスト教学校教育同盟1993）。同志社の場合、

すでにその創生の精神において非「外国宣教団」化に努めたキリスト教主義学校である点、特徴的であるとともに同校の強い自負ともなっている。しかしながら、一方で、例えばオバタ2000が、同志社を「ミッション系」と明記するように、一般社会の認識として、キリスト教主義学校がミッション・スクールと総称されていることは常識的事実である。こうした社会通念をこそ主要な問題として扱う本研究では、同志社も広義のミッション・スクールの範疇におくこととする。

- (4) 華族女学校が、チャリティのため運動会を有料で一般公開し、生徒たちのダンスを披露することになったことに対し、蜂須賀正韶（貴族院副議長）侯爵は「娘に芸人のマネをさせるのか」と激怒し、令嬢年子をカトリックの聖心女学院に転校させた。年子が後年著した「大名華族」にもこのエピソードが見える。浅見雅男氏の教示による。
- (5) 浅見氏が特に指摘される点である。「華族は、公卿華族、大名華族、新華族の別があり、それぞれピンからきりまである寄り合い所帯で、お互いに対立、反目しあっていた」（酒井1995, p.5）といった証言もある。明治十七年の華族令で、公卿・大名のほか明治維新で活躍した人々も新華族＝勲功華族として加えられた。「華族」の称号を欲しがらる彼らの要望を無視できなくなったからだといわれている。すると面白いもので、平安朝以来不仲であった公卿と大名はたちまち手を組んで、薩・長の下級武士あがりりが占める新華族を“成りあがり者”として扱うことになる。そこで種々様々なトラブルや滑稽談が発生、人々は大いに笑ったものらしい。」（酒井）

【参考文献資料】

- 浅見雅男 1999『華族たちの近代』NTT出版
 ————1999『華族誕生——名誉と体面の政治』中央公論新社1999
 奥田暁子 1994「ミッションスクールに女たちの求めたもの」『思想の科学』第8次20号1994年9月号
 オバタカズユキ、石原壮一郎2000：『大学図鑑！2001』ダイヤモンド社
 小股憲明 1994、1995「高等学校における不敬事件（一）、（二）」大阪女子大学人間関係学科『人間関係論集』11号、同12号
 ————1998『明治期における不敬事件の研究Ⅱ』科学研究費補助金研究成果報告書
 華族大鑑刊行会／日本図書センター、1990『華族大鑑』
 基督教学校同盟 1961『日本におけるキリスト教学校の現状』基督教学校同盟
 酒井美意子 1995『元華族たちの戦後史』主婦と生活社
 佐藤八寿子 1999「ミッションと『不敬』——明治二、三〇年代国民儀礼における『統合／排除』に関する一試論」1999年3月京都大学大学院提出、修士論文
 第三高等学校 1900『第三高等学校一覧』明治33年
 高橋佐門 1992『旧制高等学校の教育と学生』国書刊行会
 竹内 洋 1997『立身出世主義』NHKライブラリー日本放送出版協会
 同志社 1900『同志社各学校生徒原簿』明治33年
 同志社 1969『同志社九十年史』
 同志社 1979『同志社百年史』通史編一、二
 Notter, David、竹内洋 2000「スポーツ・エリート・ハビトゥス——パブリックスクールと旧制高等学校」（第52回日本教育社会学会大会、平成12年9月15日発表）